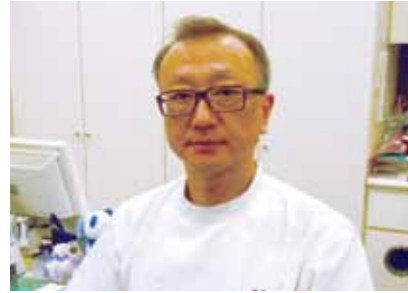


連携医院のご紹介

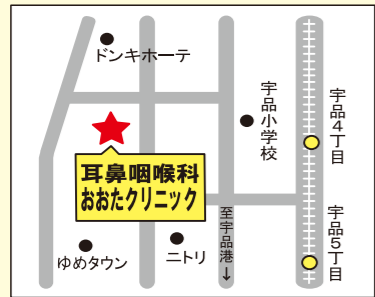
今回は「患者が主体的に治療に参加できる医療」を大切にしておられます耳鼻咽喉科おたクリニック、太田 行紀院長先生です。



太田院長先生

医療法人社団 耳鼻咽喉科 おたクリニック

〒734-0014
広島市南区宇品西5-12-45
アーバンビュー宇品フェアコースト
電話/082-256-2040
院長/太田 行紀
診療科目/耳鼻咽喉科



○いつ頃開業されましたか。

父親が昭和41年に宝町で開業しました。私は、その分院として平成20年12月に以前住んでいたことのある宇品で開業しました。この辺りは、開業当時、空き地が多く、今は全然違いますね。

○開業から力を入れて取り組んでいることを教えてください。

局所麻酔で可能な鼓膜へのチューブ挿入や鼻の内視鏡による手術、レーザーによる手術など、当院でできる手術はしております。また、患者個々に使用できるネプライザー機器を導入して、感染には特に気をつけております。

○診療で大切にしていることは何ですか。

耳鼻科は鼻や耳の奥など、患者さんが直接見るできない疾患を多く扱います。そのため、画像ファイリングシステムを利用して疾患部分の画像を患者さんに提示し、病状や

治療の経過をしっかりと把握していただくことのできる「見える医療」を心がけております。

○開業医のやりがいについて教えてください。

赤ちゃんから高齢者まで幅広い年代の方の診療にあたることができ、とてもやりがいを感じております。中には、三世代、四世代に渡って通ってくださっている方もおられて嬉しいですね。また、耳鼻科医の特徴として、内科的な治療と外科的な治療を自分で選択しながら診療できることにもやりがいを感じております。



おたクリニック外観

【取材後記】

県病院も太田院長とのやり取りを通じながら、今後も連携を深めていきたいと思っております。

もみじ



県立広島病院 〒734-8530 広島市南区宇品神田1丁目5番54号

※県立広島病院の様々な情報をホームページに掲載しています。
県立広島病院 で検索 (URL: <http://www.hph.pref.hiroshima.jp/>)

理念：県民の皆様にあわれ信頼される病院をめざします

県病院

DMAT 災害派遣医療チーム



当院のDMAT専用車

DMATとは

DMAT (Disaster Medical Assistance Team) とは、大地震や航空機・列車事故といった災害時に被災地に迅速に駆けつけ、救急治療を行うための専門的な訓練を受けた医療チームです。当院には3チーム17名のDMAT隊員がおり、災害時の出動に備えています。



DMAT隊員

DMAT専用車

この度、当院では災害発生時に被災者を救助するためDMATが被災地へいち早く駆けつけることができるように専用車両を配備しました。この車両は赤色灯やサイレンを装備し、災害時には県の許可の下、緊急走行を行うことができます。また、車載式衛星携帯電話により、一般の通信環境が途絶した状況でも関係機関との連絡が可能です。さらに車載式ストレッチャーも搭載し、被災地での患者搬送にも対応した仕様となっています。

実働実績

3年前の東日本大震災では、当院から被災地にDMAT隊員を中心とした医療支援スタッフを4回派遣しました。その他、中国5県の災害派遣医療チームによる実働訓練や、国民保護実働訓練を重ね、今後も災害時に一人でも多くの患者さんを救えるよう努めてまいります。



中国ブロックDMAT実働訓練



国民保護実働訓練の様子

県立広島病院からのお知らせ

第1回 脳卒中もみじネットの会

開催日 平成26年 5月29日(木)
時間 19:00~20:30
場所 中央棟2階 講堂
内容 ・ミニレクチャー：『広島における地域連携の在り方』
落久保外科・循環器内科医院 落久保 裕之
・症例検討：社会的要因により在宅復帰が困難と予測される脳梗塞患者
対象 脳卒中に携わる医療従事者の皆様
問合せ先 地域連携センター
TEL:082-254-1818 内線(2493)

平成26年度 緩和ケアボランティア講座

開催日 平成26年 6月23日(月)・24日(火)の2日間
時間 9:00~16:00 (受付:8時45分~)
場所 新東棟2階 総合研修室
申込期間 平成26年 6月16日(月)まで
申込方法 電話、FAXにて受け付けます。
※詳しくはホームページでご確認下さい。
参加費 無料
対象 2日間受講できる方が対象です。
問合せ先 緩和ケア支援室(担当:石橋)
TEL:082-252-6262
FAX:082-252-6261
mail:hphkanwashien@pref.hiroshima.lg.jp

紹介状持参のお願い

初診時、他の医療機関からの紹介状をお持ちでない場合、保険診療費の他2,690円のお支払いが必要となります。初診の際には、紹介状をお持ち下さい。

※当院では、予約診療を優先して診察しています。予約診療以外で受診されると待ち時間が長くなる場合がありますので、ご了承下さい。

KBネット

現在の参加医療機関は

157 機関です。
(4月15日現在)

問合せ先 地域連携センター
電話(082)252-6228(直通)

診療科だより

炎症疾患、腫瘍から網膜疾患まで、殆どの疾患に対応しています。

第28回 眼科

今回は、眼科の草薙部長に直撃インタビューです。

■はじめに「眼科」について教えてください。

眼科は眼球および眼付属器（眼瞼、涙道、眼窩組織など）の病気の診断と治療をする専門科です。

眼球はカメラの役割を担う臓器です。眼球の表面は結膜や角膜で覆われ、眼球内部にはレンズの役割をもつ水晶体、眼底にはフィルムの役割をもつ網膜、眼球の後方には大脳につながる視神経があり、これらすべてが機能することで目が見えるわけです。

眼球周囲には瞼（まぶた）、涙腺、涙道、外眼筋（眼球を動かす筋肉）などの眼球機能をサポートする眼付属器があります。眼科では、これらの眼球および眼付属器の病気を取り扱っています。

■眼科では、どのような診療がどんなスタッフによって行われていますか。

眼科医師は草薙聖、佐々木崇暁、板倉勝昌、森口裕子、神原諒子の5名です。視能訓練士3名、看護師3名、メディカルクラーク2名で眼科外来を運営しています。



部長 草薙 聖

眼科入院患者で最も多いのは白内障で、社会の高齢化とともに白内障患者も増えています。最近の白内障手術は、病院あるいは開業医で通院手術で行われることが多くなりました。当科で手術を受ける患者さんは、体調が不安定、遠方からの来院などの理由で入院手術を希望される方が多くいらっしゃいます。近隣にお住まいの患者さんであれば、通院手術にも対応しております。

当科では年間1,000件以上の白内障手術を行っています。緑内障手術や、網膜剥離や糖尿病網膜症などの網膜疾患の手術も多数行っています。最近、加齢黄斑変性についてテレビや新聞などで取り上げられることが多くなりました。加齢黄斑変性は視覚障害者の原因疾患の第4位で、少し前までは良い治療方法がありませんでした。近年、抗VEGF薬治療（薬を目に注射します）や光線力学療法（PDT）によって病気の進行を抑えることができるようになり、当科でもこれらの治療を行っています。

■最後に、眼科として心がけていることを教えてください。

目の病気はさまざまで、視力低下の原因も多種多様です。目の病気についてなじみのないことや、高齢の患者さんも多く、できるだけ分かりやすく丁寧な説明を行うよう心がけています。

新手術室が完成しました!!

当院はこのほど、新たな手術室を増設し、総数11室となりました。従来は10室で年間約6,700件近くの手術を実施してきました。今後、11室がフル稼働すれば、年間約200件の手術件数の増加が可能となります。これにより、手術待ちの日数短縮と、これまで以上に緊急手術への対応などが実現できます。効率的で柔軟性の高い運用により、広島県の中核病院として専門的医療の提供に努めます。



竣工式の様子



4Kモニタ画面



装置の確認をする桑原院長

外科医の独り言 no.32

— 粉骨砕身 —

今年もまた新しい17名の研修医たちが県病院にやってきました。今年3月に医師国家試験に合格し、これから2年間の研修を経て初めて正式の医師として認められます。この2年間、粉骨砕身、医療に従事し、知識と技術を貪欲に吸収して欲しいものです。ただし粉骨砕身というのは人のために働くことであって、自分のためだけに身を粉にして働いても粉骨砕身とは言いません。患者さんのことを第一に考えて粉骨砕身働けばおのずと知識と様々な技術は身につくはず。しかし、研修医がちゃんと一人前の医師になるためには、指導医を含めた周りのサポートが必要です。薬をしてしまえば何も身につかず、粉骨砕身働いても周りのサポートがなければただでなく心も壊れてしまい、『粉骨砕心』になってしまいます。様々なストレスに晒されて、それを一つ一つ乗り越えて行って初めて一人前の医師になっていきます。

自分自身のことを振り返ってみると、外科医になってからの30年間色々な事があり、基本的には落ち込むことの方が多かったように思います。というより良い事はすぐに忘れてしまうのだと思います。そんな中で外科医となって3~5年目あたりになると、手術を一通り経験し、救急疾患にもある程度対応できるようになります。というか「救急車?何でも来い」ってな感じのちょっと天狗になる時期かもしれません。体力的にも問題なく、少々寝なくてもガンガン、それこそ粉骨砕身働いた覚えがあります。そして心が砕けるどころか精神的にも強くなっていったように思います。

もう25年前、ちょうど外科医になって5年目、ある救急病院で当直していた時の話です。真夜中に当直の看護師さんに電話で起こされました。額を大きく切った急患が来ています、とのことでした。救急外来に降りてみると何やら異様な雰囲気、若者たちが大勢たむろしていました。最近ではあまり見かけなくな

りましたが、当時は週末の夜になると爆音を発しながら集団でオートバイに乗っていた髪はリーゼントの人たちです。その真ん中に額から目じりにかけてぱっくり切れて出血している若者が横たわっていました。それを取り囲んでいた若者たちは、私に向かって「先生よう、ちゃんと傷を縫えよ、死ぬようなことがあったら許さんぞ」と、そしてワイワイガヤガヤ。私は若い時から老け顔だったので、若造には見えなかったと思いますが、こちら外科医として天狗になっていた時期なので、大胆にも「こんなんで死ぬか」と、ただし小さな声だったので患者さんには聞こえても周りの若者たちには聞こえなかったようです。本当は「うるさいから外に出ている!」と威勢よく言いたかったのですが、気が弱いので「ちょっと静かにしてもらえませんか」と先ほどよりは少し大きな声で注意しましたが、聞き入れてもらえませんでした。あまりにもうるさいので麻酔なしで縫ってやろうかと思いましたが、患者さん自身は大人しく罪はないのでちゃんと局所麻酔をして縫合しました。周りの若者たちは縫合中も色々うるさく文句をつけてくるので「あまりうるさいと手元が狂って針が目刺さるよ」とまた小声で言うと、それを聞いた患者さんが「お前ら静かにせえ、わしの目に針が刺さったらどうするんじゃあ」と大声で一喝、皆すごすごと救急外来から出ていきました。どうも患者さんは〇〇族の頭だったようです。ただし縫合中に患者さんが大声を出したので危うく本当に針が目刺さりそうになって冷汗が出たのを今でもよく覚えています。

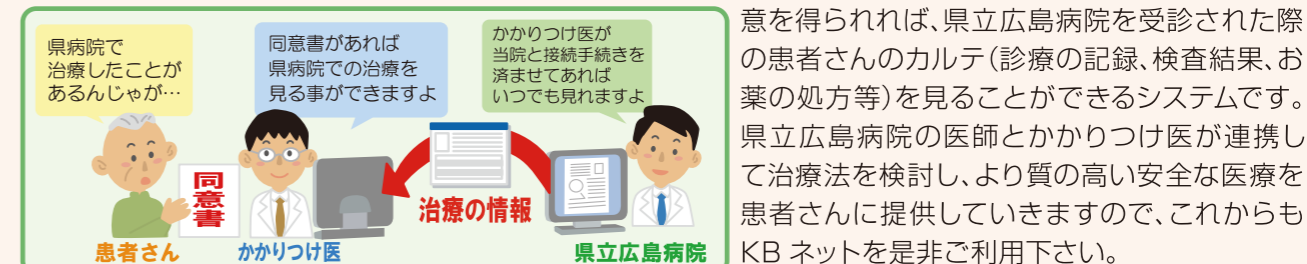


院長補佐(消化器・乳癌・移植外科主任部長) 板本敏行(いたもと としゆき)

KBネットに同意した患者さん1,000人突破!!

ご利用ありがとうございます!!

平成24年9月からスタートした「KB ネット」(県立広島病院地域医療連携ネットワーク)の利用に同意して下さった患者さんが、この度1,000人を超えました。KB ネットとは、かかりつけ医が患者さんの同意を得られれば、県立広島病院を受診された際の患者さんのカルテ(診療の記録、検査結果、お薬の処方等)を見ることが出来るシステムです。県立広島病院の医師とかかりつけ医が連携して治療法を検討し、より質の高い安全な医療を患者さんに提供していきますので、これから



KB ネットを是非ご利用下さい。